第 125 回東葛しぜん観察会

湧水のこんぶくろ池～新緑と草花と

前田悦子（千葉市）

日　時：2016 年 5 月 1 日（日）10 時～12 時　天気：晴
場　所：こんぶくろ池自然博物公園（柏市）
参加者：一般 28 名、指導員 24 名　担当指導員：坂部・長谷川・前田

手賀沼源流の一つであるこんぶくろ池は柏市の北部、海抜 15～19m のほぼ平坦な台地にあります。関東ローム層の下は常総粘土層という透水性の悪い粘土層で、この上には地下水がたまりやすくこの地下水が地表にしみだして湧水となり、こんぶくろ池や弁天池をつくりだしています。この冬には５０年ぶりに『かいぼり』が行われ、７か所の湧水口が確認されました。多い時は１日に８０ｔの水が湧き出ているそうですが、地下水による涵養量は限られているため晴天の日が続くと池が渇水状態になることもあるようです。この日も１週間前に比べ水位がだいぶ下がっているようでした。

このこんぶくろ池では県全域が暖温帯にある千葉県の他地域ではほとんど見ることができないズミ、ハシバミ、クロツバラ、ヌマガヤといった冷温帯性の植物を見ることができます。はるか昔氷河期からの移行時期であった縄文時代にはこの一帯もカバノキ属、コナラ属などの冷温帯性落葉広葉樹林であったこと。周辺では古墳時代から馬が飼育され、江戸時代には幕府直轄の『牧』があり軍馬を養成していたこと。幕府の御料林であったこと。そして湧水、湿地といった環境条件などから、今回の観察会では晩春の森に咲く植物を観察するとともに、なぜこの地にこのような冷温帯性の植物が生き残っているのかを考えてみました。

コジュケイの「チョットコイ、チョットコイ」の声で観察会が始まりました。まず、ヒメコウゾの雌花と雄花に有毒植物であるクララ。キビタキやクグイスの美声を耳にしながら、弁天池から大堀川沿いのキンランが咲き乱れる小道を歩きます。ハンノキ、胡麻の香りがするゴマギ、ウメモドキ、サワフタギといった湿地性の樹木にコナラ、コブシ、淡緑色の花のコマユミ、すっかり花の散ってしまったズミが混じります。林床には、やはり湿地性のコバギボウシやゼンマイなどのシダ類が目立ち、照葉樹はシラカシ、ヒサカキ、アオキなどわずか。ノジトラノオとヌマトラノオの花は写真で、コムラサキとムラサキシキブの葉の違いを実際に確認。ヤマザクラの大木を見上げながら花の時期を想像し、亜高山の湿原に生育するヌマガヤをこんぶくろ池で見ます。ちぎったようなハシバミの葉、実生から出たばかりの葉には赤褐色の紋様があります。実になりかけているウワミズザクラ、青空に咲くミズキ、カツラの甘い匂いがあふれる道を最後の目的地クロツバラに向かいます。樹々に埋もれていたものを周りの枝を払い、陽が十分に当たるように環境を整えて大事に守り育てているもので、千葉県ではここだけに生育が確認されています。

オマケ？に 浅間先生が見つけられた蛾を捕食するワカバグモの様子を観察。

参加者から「身近にこんな素晴らしい場所があることを初めて知りました」といった感想をいただいて観察会を終了しました。

こんぶくろ池自然博物公園は『ＮＰＯ法人こんぶくろ池自然の森』が柏市から管理運営業務を受託して活動されており、植物だけにはとどまらない貴重な森の自然を維持するために、この日も大勢の方が作業されていました。

湿った草地に生えるノジトラノオの群生地